

Round I

映画文学人生論

山本周五郎 『青べか物語』 (1960) [文藝春秋]
深沢七郎 『檜山節考』 (1955) 「中欧公論」
山田洋次 『男はつらいよ』 ((1969-95)
夏目漱石 『文学論』 (2007) 「岩波文庫」
プラトン 『パイドロス』 藤沢令夫訳 「岩波文庫」

汝自身を知れ

映画文学人生論のテーマ（主題）はなにか。

- ・ 映画とは何ぞや
- ・ 文学とは何ぞや
- ・ 人生とは何ぞや

である。映画も文学も芸術の一種だとすれば、

- ・ 芸術とは何ぞや

も考えなければならぬが、芸術は棚上げして、映画と文学に限定することにしよう。

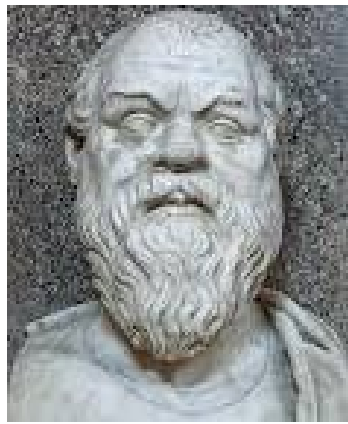
映画と文学のガイドは蒸気河岸の先生にフーテンの寅さん、それに夏目漱石『文学論』。

漱石によれば、「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざるべからず」。黒船来航以前の文学と文明開化以後の文学とは意味が違うのだ。

では、英語に所謂文学とはどういう意味か。それを解説した書が『文学論』のはずだが、「立派に建設されないうちに地震で倒された未成市街の廃墟のようなもの」と作者がいう難解な書で、解読は一筋縄ではないかない

それでも、類書と比較して、文学とは何ぞやという疑問の解明に迫る書としては、『文学論』にまさるものはないと思う。問題は私の読解力だ。

『文学論』と比べれば、『男はつらいよ』は気軽に眺めていることができる。映画は文明開化の産物の一つで、日本では明治二十九年にはじめて神戸で上映されたという。最初は活動写真と呼ば



Round I ———— 映画文学人生論

れていたが、活動写真も映画であり、映画の意味が時代によって異なるということはない。

しかし、要するに、映画も文学も、人生とは何ぞやを知るための二次的なものといってもよい。二次的とはいえ、映画と文学には人生とは何ぞやという問いがふくまれている。

人生には自分の人生と他人の人生があるが、とりあえず自分の人生を優先するとすれば、

・自分とは何ぞや

を考えなければならぬ。汝自身を知れ、を哲学者のソクラテスはモットーにしたと言われる。

汝自身を知れ——は古代ギリシアのデルフォイの神託だが、神託など信じない日本人大多数は、

・自分とは何ぞや

を知らない。自分も知らず、他人も知らずに平気で人生を渡っている。

映画と文学の効用は実は他人の人生を知ることによって、自分の人生の軌道修正をすることができる点にある。人のふり見てわが身を直せ、人を知り、己を知れば、百人煩惱恐るべからず。

第一ラウンドでは、『青べか物語』から『檜山節考』まで百本の映画を観て、その原作百篇を読むことにする。蒸気河岸の先生も フーテンの寅さんも、おりん婆さんも私にとっては他人であるが、その運命は他人事ではない。

山へ行けもうすぐ除夜の鐘が鳴る